

| | |
|------------------|---|
| Title | 稲妻の想像力：メルヴィルの短編にみる主体の通約可能性 |
| Sub Title | Electrifying the republic : commensurability of the subject in the tales of Herman Melville |
| Author | 大和田, 俊之(Owada, Toshiyuki) |
| Publisher | 慶應義塾大学藝文学会 |
| Publication year | 2000 |
| Jtitle | 藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.78, (2000. 6) ,p.242(147)- 257(132) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00780001-0257 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

稲妻の想像力

—メルヴィルの短編にみる主体の通約可能性—⁽¹⁾

大和田 俊之

白き鯨を狂信的なまでに追い続けるさなか、吹き荒れる嵐に見舞われたエイハブは、落雷を恐れて避雷針を海に投げ込もうとする一等航海士スターバックを制し、天空の稲妻に対して怒りの叫び声をあげる。

“Avast!” cried Ahab; “let’s have fair play here, though we be the weaker side. Yet I’ll contribute to raise rods on the Himmalehs and Andes, that all the world may be secured; but out on the privileges! Let them be, sir.” (505)

ハーマン・メルヴィル (1819-1891) の『白鯨』、「蠟燭」(“The Candles”) と題された第119章は、宗教儀式のような荘厳さを漂わせ、小説全体の崇高性を象徴する章としてこれまでも度々言及されてきた。「嵐」や「稲妻」の描写は、怪奇的な雰囲気醸し出すゴシック・ロマンスの伝統を踏まえたものであり、天に戦いを挑むエイハブの姿は畏怖の念を喚起する。また、それは形而上学的な超越性をも表すことで、1920年代以降に構築された「ロマン主義作家メルヴィル」のイメージとも正確に重なるものであるといえるだろう。

しかし、この「稲妻」のイメージは、その後メルヴィルが雑誌に執筆することを余儀なくされた短編小説において、大きく変容する。大仰な文体は影を潜め、まるで自らの作品のパロディーを書き綴るような、喜劇的とも言える登場人物のやりとりの中で「稲妻」は描写されるのだ。この文体

上の変化は何を意味しているのだろうか。

本稿では、1854年8月に *Putnam's Monthly* 誌上に掲載されたメルヴィルの短編「避雷針売りの男」(“The Lightning-Rod Man”)を中心に、同時期に執筆された他の短編をも参照することによって、メルヴィルの作品史上にみられる「主体」のイメージの変遷を辿る。メルヴィルの短編群が、様々な対立、或いは差異を原動力として物語を進行させていることは多くの研究者が指摘しているが、これらのテキストを、様々な認識作法が混在していた19世紀アメリカ社会に配置することによって、「避雷針売りの男」にみられる対立そのものが無効になる過程を浮き彫りにし、その結果として『白鯨』などの長編とは異なる平坦な文体の必然性を提示したい。

1) 稲妻の混乱

「避雷針売りの男」は、メルヴィルが執筆した小説の中でも最も短い作品の一つである。我が国においては濫澤龍彦の短編「避雷針屋」の底本として知られるこの作品は、同時代のアメリカではメルヴィルの代表的な短編として親しまれていた。Hershel Parker が検証したように、この作品は19世紀アメリカで既に定着しつつあった、セールスマンを登場人物としたジャンル小説の枠組みを踏襲しているからである。二年後にはメルヴィル唯一の短編集 *The Piazza Tales* に収録されるものの、多くの読者を獲得するようになるのは、皮肉にも1858年に William E. Burton の編集した *Cyclopedia of Wit and Humor* に収録されてからであった。行商を主人公とするユーモア小説ばかり15編を集めたこのアンソロジーは、1898年まで版を重ね、結果的にメルヴィルが存命中に一般の読者が触れることが出来る唯一の短編となったのだ。

物語は単純である。大嵐のある日、山奥に住む語り手の家に一人の見知らぬ男がやってくる。少々興奮気味に稲妻の危険性を説く彼は、家の主人に避雷針を売りつけようとするが、語り手はそれを拒絶する。男はしばし稲妻に関する科学的知識を説き、避雷針の必要性を強く主張するものの、最終的に語り手が半狂乱となった避雷針売りの男を追い出して終わる。

長い間、批評家は避雷針売りの男をキリスト教聖職者の象徴として解釈してきた。今では一見不自然に思われるこの解釈にも確固とした根拠はある。頑なに避雷針の購入を拒否する語り手に対し、この見知らぬ男は「不信心」を表す“impious”, “infidel” (124) などといった言葉で罵り、語り手の冒瀆を責めるからである。しかし、「避雷針」という言葉がアメリカ史上に占める特権的な響きや、当時メルヴィルが短編と平行して前掲 *Putnam's Monthly* 誌に連載していた歴史小説、*Israel Potter* の登場人物を考慮するとき、避雷針売りとベンジャミン・フランクリンを結びつける発想が出てくるのは自明のように思われる。事実、Allan Moore Emery はメルヴィルが作品を書く上で参照したと思われる文献を丹念に調べながら、避雷針売りの男にフランクリン、そして語り手にはコットン・マザーを重ね合わせている。

この作品がフランクリンだけではなく、コットン・マザーの *Magnalia Christi Americana* をも下敷きにしているという指摘は唐突ではない。その第6巻には“Ceraunius; Relating Remarkables Done by Thunder” という章が含まれているだけでなく、マザーは他の著書においても「稲妻」について多くの記述を残しているからである。Emery は、雷を電気として捉える避雷針売りの男に対し、天上界にプラスやマイナス極以上の神性を求める語り手こそが、コットン・マザーを表象していると主張する。ここでは、今日では既に聞き慣れた感のある科学と宗教の対立が提示されている。しかし、近年の批評が明らかにしてきたことを踏まえれば、19世紀アメリカにおいて「科学」と「宗教」がそれほど対立する概念として捉えられていたかどうかは疑問である。むしろこのような対立は、1920年代のメルヴィル・リヴァイヴァル以降、事後的に見出されたと考える方が自然ではないか。

短編「避雷針売りの男」において、語り手と行商の間で繰り広げられる滑稽な論争が、稲妻をどのように把握するかということをめぐる起こった19世紀アメリカの認識論的混乱を表していることは確かである。では、それが批評史に見られるような対立構造でないのだとすれば、いかなる意

味において混乱なのだろうか。この分析を進めるためには、メルヴィルの他の短編を参照してみなくてはならない。

2) 稲妻の可視化

1856年5月に発表された「林檎材のテーブル」(“The Apple-Tree Table; Or, Original Spiritual Manifestations”)は、メルヴィルがマザーの作品を下敷きにしたいま一つの作品であり、19世紀のアメリカ社会を席卷した降霊術や催眠術などといった疑似宗教や疑似科学、つまり、「科学」と「宗教」の中間領域への橋渡しをしてくれる点で示唆的である。

「林檎材のテーブル」のプロット自体は同時代に広く知られていたものだ⁽²⁾。60年もの間、ある農家の台所に置いてあった林檎材の古いテーブルの自在板から一匹の美しい虫が現れてくるというこの逸話は、当時の人々にとって復活と不死への信念を強くするものであった。メルヴィルの短編においては、物語の冒頭に屋根裏部屋からテーブルが発見され、それと同時に埃を被ったマザーの *Magnalia* が見つけられる。その書物は当初、語り手にとって就寝前の一時に眺めるものでしかない。あくまでも嘲笑の対象であり、現実社会の諸問題を扱った書物とは到底捉えられていないのだ。しかし、ある晩語り手は突然マザーを全く異なったイメージで解釈していることに気付く。

They began to put on the aspect of reality. Now, for the first time it struck me that this was no romantic Mrs. Radcliffe, who had written the “Magnalia;” but a practical, hard-working, earnest, upright man, a learned doctor, too, as well as good Christian and orthodox clergyman. What possible motive could such a man have to deceive? His style had all the plainness and unpoetic boldness of truth. (382 emphases mine)

このように、語り手はマザーが単なる非科学的な迷信家ではなく、正統

な「宗教家」であると同時に教養ある「科学者」でもあるという方向への判断の修正を迫られる。そしてこうしたマザーに対する認識の転換と同時に物語が動き始めるのだ。机から奇妙な音が発せられるのを契機に家族は動揺し、娘二人と語り手の妻はそれを「精霊」の仕業だと確信する。語り手はその解釈に異議を唱えるが、一騒動の後、やがてそれは林檎材の中から現れた小さな虫の発する音であることが分かる。

Carolyn L. Karcher の研究が示すとおり、これは19世紀中葉にアメリカを席卷した降霊術の流行、具体的にはニューヨーク州ハイズヴィルに住む John D. Fox の二人の娘が1848年に引き起こした騒動を題材にしたものである。“Rapping” と呼ばれる音のセッションによって死者の精霊との交信が可能であるという噂は、人々の間で熱烈に歓迎されていた。それは不死の魂というものを前提とすることから、聖書とも矛盾しなかったのである。

19世紀アメリカにおいて、降霊術や骨相学、動物磁気療法など、今では疑似科学として捉えられる一連の分野は知識人を含めて多くの人々を魅了した。超越的、或いは神秘的存在との接触を可能にするといわれたこれらの疑似科学は、一つにはイギリスの経験主義に対抗するためにアメリカ超絶主義思想と呼応し、ナショナリズムを喚起する手段として知識人の間で用いられたのである。また、これらの疑似科学は倫理的な側面を強く保持していたことから、当時の社会改革運動や女性解放運動とも広く連動する歴史的現象として広まっていく。Arthur Wrobel が言うように、疑似科学に共通しているのは、アメリカの歴史を特殊なものとして捉える姿勢だけではなく、肉体と精神、或いは物質的なものと心理的なものの分離を否定する思考でもあったのだ (Wrobel 1)。

作品は終始一貫として、テーブルから聞こえる奇妙な音を巡る家族の様々な解釈の対立を描いている。初めに音が精霊の仕業であると断言するのは語り手の娘である。彼女はその正体が虫であることが判明した後も、精霊の存在を信じ、あたかもソローの記述をなぞるように次のように主張する。

“[S]ay what you will, if this beauteous creature be not a spirit, it yet teaches a spiritual lesson. For if, after one hundred and fifty years' entombment, a mere insect comes forth at last into light, itself an effulgence, *shall there be no glorified resurrection for the spirit of man?*” (397 emphasis mine)

降霊術を頑なに信じ、それが精霊の仕業だと譲らない娘に対して、語り手はそれがあくまでも虫の音に過ぎないと主張する。コットン・マザーの著作を契機に起こった家庭内の論争は、不可解な現象をいかにして説明するか、という問題として捉えることができる。そして、「避雷針売りの男」において対立の争点がまさに「稲妻」をどう捉えるかという点であったことを想起するとき、「避雷針売りの男」における語り手とこの娘の類似性が際立つのである。

周知の通り、ニュー・イングランド神権制の時代において、稲妻は「神の啓示」であり、神学的意味が付与されていた。「林檎材のテーブル」において、「奇妙な音」という不可解な現象に対して「降霊術における精霊の仕業」という物語を付与する娘と、「避雷針売りの男」において稲妻を「神の啓示」だとして物語を読みとる語り手は、正確に対応する存在であると言える。それは、「見えないもの」を「見えるもの」へと変換するための疑似科学的な認識作法とでもいえるかもしれない。またこれを、1839年に発明されたダゲレオタイプや写真術など、19世紀を特徴づける視覚技術の発展と結びつけることは容易に可能だろう。

このように宗教と科学といった対照ではなく、対象の認識方法の差異として捉えるとき、「避雷針売りの男」における対立は、実はそれほど自明なものではなくなってくる。19世紀の疑似科学的認識作法においては、避雷針売りの男が稲妻を「電気」として捉える態度も、語り手が「神の啓示」として捉える態度と殆ど変わりはないからだ。何故なら「電気」という流体自体は不可視なものであり、それは空気や伝導体といった媒体を通

してのみ認識が可能だからである。つまり、稲妻を「電気」で説明しようとする認識作法は、それが不可視なものを可視化するための言説装置である限り、「神の啓示」という別の言説体系と認識構造においては全く同一であると言わなければならない。メルヴィルはマザーとフランクリンという、ピューリタン神権制から共和制へと移行する社会における二人の代表的個性を、対立として捉えていたのではなかったのである。前述したとおり、メルヴィルはコットン・マザーが牧師であると同時に科学者でもあるということ把握していた。また批評史において混乱の一因となっていた、避雷針売り自身が聖職者の用語を使用していることも、この点から説明が可能であるといえるだろう。メルヴィルは、一見対立をなす物語構造のうちにそれを無効にする要素を忍ばせているのである。

では、メルヴィルはこの短編において実際には何を描こうとしていたのか。ここで注目すべきことは、稲妻がピューリタン神学において、神の怒りの象徴であると同時に、「自己滅却の一撃」(self-annihilating stroke)として認識されていたことだ。そして、この「自己の滅却」という概念をよりどころに今ひとつの短編、1856年に執筆された「煙突物語」(“I and My Chimney”)を参照することにより、「避雷針売りの男」の対立はさらに崩れていくことになる。

3) 数値化される個人

「林檎材のテーブル」とほぼ同じ登場人物で構成されているこの物語の中心は、「奇妙な音」ではなく、煙突である。家の中心に堂々とそびえ立つ煙突に対して、ここでも語り手と妻は意見を異にして対立している。語り手は煙突についてこう語る。“In brief, *my chimney is my superior*; my superior by I know not how many heads and shoulders; my superior, too, in that humbly bowing over with shovel and tongs, I much minister to it.” (353) つまり、煙突は語り手自身をも上回る存在であり、その偉大さは計り知ることができない。それに対して進取の気象に富む妻は、その崇高さには全く無頓着である。彼女は煙突を取り払おうと画策

し、測量調査を依頼する。以降作品中、妻の代理人としての役割を果たす石工の煙突への態度は注目に値する。彼は徹底的に煙突を数値化していくのである。

“Twelve feet square; one hundred and forty-four square feet! Sir, this house would appear to have been built simply for the accommodation of your chimney.” (366)

“Look, sir,” said he, taking a bit of red chalk from his pocket, and figuring against a whitewashed wall, “twenty times eight is so and so; then forty-two times thirty-nine is so and so — ain’t it, sir? Well, add those together, and subtract this here, then that makes so and so,” still chalking away. (366)

対象を数値、或いは単位で表象すること。それは「この煙突」独自の特徴から目を反らすことであり、固有性を剥奪し、他の建造物との比較を可能にすることである。語り手が常に自分自身との比較において煙突の壮大きさを捉え、しかも、捉えきれないところにこそ語り手にとって煙突の偉大さがあるのだとすれば、煙突の測量、数値化といった作業は、その相対化であると同時に一般化でもあり、対象と観察者の分離を可能にする作業であると言える⁽³⁾。

これはマザーの言う「自己滅却の一撃」と、いわば裏返しに対応するものなのだ。ピューリタン神権制においては、人間の価値は神に対する敬虔によって決定されていた。一人一人の人間が有する固有性や歴史性などを一端括弧にくくることによって自己を滅却し、敬虔を量的に計算することによってはじめて人は自らを神に全面的に委ねることが可能になる。神の前では、人間は等しく通約可能な存在になるのである。そしてこのような認識は、短編「避雷針売りの男」における語り手の態度と正確に重なるものであるといえる。語り手は物語の最後、避雷針売りの男に罵声を浴びせ

ながら追い出そうとする場面において次のように宣言する。

“Who has empowered you, you Tetzal, to peddle round your indulgences from divine ordinations? *The hairs of our heads are numbered, and the days of our lives.* In thunder as in sunshine, I stand at ease in the hands of my God. False negotiator, away!”
(124 emphasis mine)

強調の部分が受動態で記述されている点に注目されたい。ここでは、石工の親方によって数値化される煙突と同様に、固有性が消失し、量に還元されることによって相対化されてしまう主体としての語り手が描かれているといえるのだ。

一方、避雷針売りの男は数値化する主体として現れているように見える。男は“Only one dollar a foot.” (121) や、“Only one rod, sir; cost, only twenty dollars.” (123) というように、避雷針の値段を繰り返し語り手にアピールする。それは数値化することによって煙突の固有性を消失させた石工と同様に、貨幣を媒介させることによって、それまで「神の啓示」として捉えられていた稲妻を計算可能なものへと転換させる操作であると言える。では、その数値化する主体とはいかなるものなのだろうか。

1752年にベンジャミン・フランクリンは凧とライデン瓶を携えて外へ繰り出し、空から稲妻を導き出し、それが地上に存在する電気と同じ流体であることを証明した。この逸話に関して、Mitchell Robert Breitwieserは次のように論じている。

Franklin’s electrical experiments were both examples of Enlightenment inquiry and images of the Enlightenment’s act of laying claim to the virtues man had previously beheld from afar in the divinity that demanded self-annihilation. Self had become godly. (Breitwieser 211)

避雷針売りの男をフランクリンに対応させる Emery に習うならば、この短編においても「神聖化する自己」を読みとらねばならない。しかし、この記述は『白鯨』におけるエイハブには当てはまるかもしれないが、「避雷針売りの男」とはかけ離れた描写だと言わざるを得ない。数値化される語り手に対して、数値化されると思われる避雷針売りの男には、何よりこの“godly”なる形容詞に集約される「神聖さ」が決定的に欠けているからだ。それは稲妻を電流として数値化する神聖な主体と言うよりは、むしろ電流そのものとして描かれているといえるのではないか。電流としての主体。それは、短編「避雷針売りの男」を締めくくる最後の一文において、語り手の口を通して鮮やかに描写されている。

But spite of my treatment, and spite of my dissuasive talk of him to my neighbors, the Lightning-rod man still dwells in the land; still travels in storm-time, and drives a brave trade with the fears of man. (124)

電気や貨幣が、それ自体に価値を内在させるというより、流れることによつてのみその存在を主張するように、この避雷針売りの男も人々の心につけ込むことによつてしか存在することが出来ない。「避雷針売りの男」においては、様々な対立が無効化された結果、語り手だけではなく、避雷針売りの男自身も最終的には通約可能な個人として、まるで電流のように辺りを彷徨う者として描かれている。

ここでは一見、メルヴィルがピューリタン神権制への逆行を意図しているかのように見える。しかし、決定的に異なるのは、もはや計量可能な個人を超越的視点から統御すべき神は存在しないという点だ。通約可能な人間は、神という外部の定点に支えられることによつてはじめて秩序だった社会を形成することができた。そうした全体を見渡す特権的な視線を失った状況において主体が通約可能であるということは、人間がただ無秩序に

浮遊，林立せざるを得ないということを意味する。そこにあるのは，単に平坦化された個人の集合であり，神性を剝奪され，宙づりにされた無名性の群とでも呼べる状況なのである。

4) 結論

アメリカ文学史上、「避雷針」という言葉が否応なくフランクリンを想起させるものであれば，それが更にゴシック・ノヴェルの古典 *Frankenstein* への接続を誘惑するものであることは否定することが出来ない。Maria M. Tatar の詳細な研究を待つまでもなく，Shelley が「電気」という主題を選んだ経緯において，彼女の夫がフランクリンの思想に熱狂していたことの影響を想像することはそれほど難しくはない⁽⁴⁾。またメルヴィル自身，Shelley や Radcliffe に親しんでいたことは広く知られており，特に「避雷針売りの男」の翌年に執筆された短編「鐘塔」(“The Bell-Tower”)にはゴシック・ロマンス，特に *Frankenstein* の影響が指摘されて久しい。

Frankenstein，或いはプロメテウスの怪物としての避雷針売りの男に解釈を発展させることは，本稿の主題にとって重要な契機が含まれている。何故なら，Chris Baldick が明らかにしたように，*Frankenstein* は何よりフランス革命のメタファーとして濫用されてきたという歴史があるからだ。Baldick はゴシック・ノヴェルの隆盛と，フランス革命に強固に反対した Edmund Burke などの政治パンフレットの同時代性を指摘しつつ，そこでは何より「怪物」としての「民衆」が保守派によって描き出され，恐れられていたことを指摘する (Baldick 18)。*Frankenstein* は，王政を打倒し，正に怪物のように自由と権利の獲得を叫びながら市街地を駆けめぐる民衆の姿を通して，近代民主主義の成立過程におけるグロテスクな側面を赤裸々に描写するのである。そして，「避雷針売りの男」において，謎の行商が神を否定することによって現れた主体の姿を刹那的に切り取って見せたことを思い起こせば，ここに *Frankenstein* と「避雷針売りの男」における政治性の正確な対応を読みとることが可能になる。いずれも

「王」や「神」といった超越性が否定される過程を描き出しているだけでなく、その後の世界における主体のあり方を決定付けているのである。

しかし、「避雷針売りの男」において提示されているのは、神なき時代の「神聖化した」主体ではない。この短編があくまでも『白鯨』の後に執筆されていることを忘れてはならないのだ。この作品の意義は、メルヴィルの作品史上に正しく位置づけることによってのみ把握できる。例えば、メルヴィルをアメリカ文学史上のキャノンとして位置づけた F. O. Matthiessen は、その記念碑的著作において次のように述べている。

Anyone concerned with orthodoxy holds that the spiritual decadence of the nineteenth century can be measured according to the *alteration in the object of its belief from God-Man to Man-God, and to the corresponding shift in emphasis from Incarnation to Deification*. Melville did not use those terms, but he had been responsive himself to that *alteration, from belief in the salvation of man through the mercy and grace of a sovereign God, to belief in the potential divinity in every man*. (Matthiessen 446 emphases mine)

Matthiessen は、メルヴィルが神の恩寵を通じた人間の救済から人間自身の神格化への転換をテーマとして描いたとして、「ロマン主義作家メルヴィル」というイメージを広く定着させることに成功した。それは、例えば『白鯨』のエイハブに見事に具現化されていると言えるだろう。

It seemed as though, by some nameless, interior volition, he [Ahab] would fain have shocked into them [Starbuck, Stubb, Flask] the same fiery emotion accumulated within the Leyden jar of his own magnetic life. The three mates quailed before his strong, sustained, and mystic aspect. (165 emphasis mine)

Matthiessen のように『白鯨』をあくまでもメルヴィルの作品史上の頂点としてみるかぎり、その後にかかれた短編群は二次的な作品としてしか評価を下すことが出来ない。しかし『白鯨』を、その6年後にかかれる『詐欺師』(*The Confidence-Man*) にいたるまでの発展途上の作品であるとする視点を取るとき、「避雷針売りの男」にこそ重要な転換点を見出すことが出来るのだ。それはエイハブのように、突出した存在感を持つ登場人物が小説を牽引していく「物語」から、主人公自身が登場人物の中に埋没し、様々な仮面を通してのみ読者の前に現れる「非一物語」への転換だと言える。『詐欺師』には、エイハブのようなカリスマ的个人も存在しなければ、それを中心に形成される確固としたプロットも存在しない。ミシシッピ川を下る船上において、謎の男が様々な仮面を施しながら乗客との会話を進めていくこの作品については、「詐欺師とは一体誰なのか」、或いは「詐欺師は小説中に何人登場するのか」という疑問が未解決な問題として研究者を悩ませている。しかし、メルヴィルがこの詐欺師を、独自の歴史と固有性を備えたヒロイックなエイハブに連なる存在としてではなく、まるで電流のように計量化され、読者が様々な仮面を通してのみ把握できる流動的な存在として描いたのだとすると、このような問い自体がそもそも転倒していることになる。「詐欺師とは一体誰なのか」といった本質主義的な問題提起は、電流的性格を帯びた主人公の前ではあらかじめ禁じられているのである。

そしてこれは、ピューリタン神権制において神の厳格な統制のもとで通約可能な存在であった人間が、神に代わって神聖なる立場を確保、推進したかに見えた瞬間、神なき時代に浮遊する無名の民に成り下がってしまうという、20世紀に至るアメリカ史を予見する作家としてメルヴィルを捉えることを可能にする。「避雷針売りの男」において、メルヴィルはアメリカという国家における電流的主体を描き出した。それは、グロテスクな革命を通して民主主義が成立した過去を見据えながら、自我の極端な肥大化をもたらすロマン主義的主体の瞬間的体現を幻影として描きつつも、その

後に散在する流動的で無秩序な主体の残骸をも確実に透視する。短編「避雷針売りの男」に描かれている認識論的混乱は、まさにこの歴史の転換点そのものであったのである。

* 本稿は慶應義塾大学藝文学会（1999年6月16日）における発表草稿「稲妻の想像カールメルヴィルの短編にみる疑似科学」をもとに、大幅に加筆修正を試みたものである。

注

- (1) 「通約可能性」という用語が、トマス・クーンがパラダイム間の断絶を形容するために定義した *incommensurability* 「通約不可能性」に依っていることは言うまでもない。しかし、ここではより直接的な影響として、「正義」の「通約可能性」を模索した Wai Chee Dimock の著書、*Residues of Justice* を挙げる。Dimock が主張するように、「通約可能」であるということは代替可能であり、それ故に一般化、計量化が可能になるのである。
- (2) 例えば、H. D. ソローは *Walden* の最終章で、そのエピソードについて次のように語っている。

Every one has heard the story which has gone the rounds of New England, of a strong and beautiful bug which came out of the dry leaf of an old table of apple-tree wood, which had stood in a farmer's kitchen for sixty years, first in Connecticut, and afterward in Massachusetts,— from an egg deposited in the living tree many years earlier still, as appeared by counting the annual layers beyond it; which was heard gnawing out for several weeks, hatched perchance by the heat of an urn. Who does not feel his faith in a resurrection and immortality strengthened by hearing of this? (Thoreau 222)

- (3) Gilles Deleuze の古典的な図式に従えば、代替（交換）可能な particularity は generality に対応し、一般化が不可能な singularity は universality に対応する。むろんここでの煙突の数値化は、singular な存在であるはずの「この煙突」を particular なものに交換する作業であると言える。
- (4) Tatar は *Frankenstein* とフランクリンの思想について疑似科学的な視点から非常に刺激的な論考を展開している。

参考文献

- Baldick, Chris. *In Frankenstein's Shadow : Myth, Monstrosity, and Nineteenth-Century Writing*. Oxford : Clarendon, 1987.
- Breitwieser, Mitchell Robert. *Cotton Mather and Benjamin Franklin : The Price of Representative Personality*. Cambridge : Cambridge UP, 1984.
- Coale, Samuel Chase. *Mesmerism and Hawthorne : Mediums of American Romance*. Tuscaloosa, AL : U of Alabama P, 1998.
- Deleuze, Gilles. *Difference and Repetition*. Trans. Paul Patton. New York : Columbia UP, 1994. 『差異と反復』(財津理訳) 河出書房新社, 1992年。
- Dimock, Wai, Chee. *Residues of Justice : Literature, Law, Philosophy*. Berkeley : U of California P 1996.
- Emery, Allan Moore. "Melville on Science: 'The Lightning-Rod Man'." *New England Quarterly* 56. 4 (1983) : 555-68.
- Karcher, Carolyn L. "The 'Spiritual Lesson' of Melville's 'The Apple-Tree Table'." *American Quarterly* 23. 1 (1971) : 101-09.
- Matthiessen, F. O. *American Renaissance : Art and Expression in the Age of Emerson and Whitman*. New York : Oxford UP, 1941.
- Melville, Herman. *Moby-Dick ; or, The Whale*. The Writings of Herman Melville. Eds. Harrison Hayford, Hershel Parker and G. Thomas Tanselle. Vol. 6. Evanston : Northwestern UP and The Newberry Library, 1988.
- . *The Piazza Tales and Other Prose Pieces 1839-1860*. The Writings of Herman Melville. Eds. Harrison Hayford, Hershel Parker and G. Thomas Tanselle. Vol. 9. Evanston : Northwestern UP and The Newberry Library, 1987.
- Nye, David E. *Electrifying America : Social Meanings of a New Technology, 1880-1940*. Cambridge : MIT P, 1990.
- Parker, Hershel. "Melville's Salesman Story." *Studies in Short Fiction* 1 (1964) : 154-58.
- Pribek, Thomas. "'Between Democritus and Cotton Mather': Narrative Irony in 'The Apple-Tree Table'." *Studies in the American Renaissance* (1989) : 241-55.
- Shusterman, Alan. "Melville's 'The Lightning-Rod Man': A Reading." *Studies in Short Fiction* 9 (1972) : 165-74.
- Smith, Richard Dean. *Melville's Science : 'Devilish Tantalization of the*

- Gods!*. New York : Garland, 1993.
- Stoehr, Taylor. *Hawthorne's Mad Scientists : Pseudoscience and Social Science in Nineteenth-Century Life and Letters*. Hamden, CT : Shoe String, 1978.
- Tatar, Maria, M. *Spellbound : Studies on Mesmerism and Literature*. Princeton : Princeton UP, 1978. 『魔の眼に魅されて・メスメリズムと文学の研究』(鈴木晶訳) 国書刊行会, 1994年。
- Thoreau, Henry D. *Walden and Resistance to Civil Government*. Ed. William Rossi. New York : Norton, 1992.
- Winnick, R. H. "Melville's 'The Candles' and the Easter Vigil." *Nineteenth-Century Literature* 53.2 (1998) : 171-87.
- Wrobel, Arthur, ed. *Pseudo-Science and Society in Nineteenth-Century America*. Lexington : UP of Kentucky, 1987.
- 池田清彦『構造主義科学論の冒険』講談社学術文庫, 1998年。
- 『科学とオカルト・際限なき「コントロール願望」のゆくえ』PHP 研究所, 1999年。
- 巽孝之「アメリカン・ルネサンスと視覚芸術」『英語青年』1998年10月号, 2-5頁。